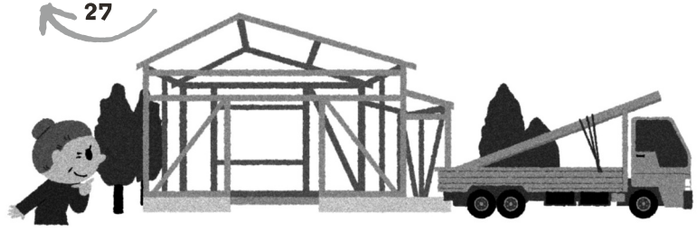
変わる日本の「暮らし」と「まち」 27

# 地域の住民による自力再建

## 岩手・山田町（やまだまち）震災復興事業（2013年◆平成25年から実施中）



新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

切り立った岩が海に迫るリアス式海岸。そのなかでも、大きく口を開いた山田湾は穏やかな入り江として知られる。ここを世に知らしめた出来事がある。

湾の沖に浮かぶ大小2つの島のうち、大きい島はオランダ島と呼ばれる。命名の契機は1643年に起こったオランダの探検船ブレスケンス号の漂着だ。鎖国が始まった江戸時代、外国船の入港は長崎の出島以外禁じられていた。それでも山田の民は水と食糧を求めて上陸した船員をもてなした。

探検に戻ったブレスケンス号だが、山田の厚意に気を良くして1ヵ月半後に再入港。しかし、こんどは南部藩の策略で船員は捕らえられ江戸に護送された。この出来事から370年の時を経た今、山田町とオランダ・ザイスト市は友好都市として交流が続いている。

### ◆自力で住まいを再建する住民

東日本大震災による津波は普段は穏やかな山田湾も襲った。追い討ちをかけるように発生した火災が被害を拡大させる。町の中心の陸中山田駅周辺の10haと町役場周辺の6haが2日間にわたって燃え続けた。山田町全体では半数以上の家屋が被災し、800人を超える犠牲者を出した。

悲しみを乗り越え、まちは復興へ向けて動き出す。津波から命を守り、産業を再生し、住民主体の地域づくりを基本理念とした。パートナーに選ばれたのはUR。山田復興支援事務所の國澤正明は震災から1ヵ月後に山田に入り、その日から1週間、津波到達点をしらみつぶしに歩き回った。

「復興を考えるうえで、今回の津波の高さをどうとらえるかについて考え続けました。答えは津波の来ない高台への移転でした」

山田町の選択も、高台移転と盛土による嵩上げだった。しかも山田、大沢、織笠など、いくつかの地区ごとに移転する計画だ。これには理由がある。山田町は1955年に町村合併が行われたが、それぞれの地区は成り立ちも特色も異なる。漁業権も居住が条件になるので、住み慣れた地区を離れるという選択肢はない。現山田町長の佐藤信逸さんはこう語る。

「復興への道のりはたいへんなことが多い。でも、次の山田町を担う若い人が20年後に『このまちでよかった』と思ってもらえるようなまちづくりをしたいですね」

織笠地区は、カキやホタテなど養殖業が盛んだ。震災時には中心を流れる織笠川を津波が遡上、半数以上の家屋が流された。津波への恐怖心は強く、住民は「海は見たくない」と高台移転を望む。移転にあたって、佐藤町長は住民による自力再建を推奨した。

「小さくても楽しい我が家を、なるべく自前で建てていただきたいと考えました。そのために必要な資金の一部は町と県で用意し、金利の支援も提供する予定です」

住民の生活の安定と定着率の向上を考えれば当然の方針だ。町民も別の理由で自力再建を選ぶ。60年に嫁いで以来50年にわたって織笠で生活する菊地サカエさん（80）もその1人である。

「アパート生活をしたことがないし、壁の薄い仮設住宅も嫌。小さくてもいいから、1日も早く自分の家で穏やかに暮らしたいの」

山田湾から織笠川が横切る織笠で急ピッチで進む復興作業。

菊地さんはさらに続ける。

「工事の機械の音を聞き、土砂を運び出すダンプを見ると、復興が始まったと実感できるわ。作業員の人に工事の進み具合を聞くと親切に教えてくれるので、話を聞くたびにワクワクするのよ」

URによって高台の造成工事は急ピッチで進む。それだけでなくURと地域住民のつながりも生まれている。菊地さんへの取材には國澤も同行したが、彼と菊地さんの会話は長年の知己のようだ。

「URさんの力なくして、山田の復興は進みません。今後も町と両輪で復興を進めていきたい」

佐藤町長もそう話す。来年3月には一部造成が完了し、早ければ来夏には織笠に家が建つ。

### ◆商店街の再興で人を呼び戻す

織笠に隣接する山田地区も、中心部の嵩上げと高台移転を進め、陸中山田駅と駅前商店街の復活を目指している。再興はおよそ2年後の予定だという。

山田には、過疎化が進むまちを活性化しようと、地場の若者らが立ち上げた「やまだ夢プロジェクト」がある。そのスタッフのひとりが椎屋百代さんである。地場のビール会社とコラボし、海辺のカキ小屋でビールを飲みながら地元のカキを食べるイベントなどを成功させてきた。

「こういう活動は、なかなか実現しないものです。でも私たちはやると言ったら必ずやるんです」

椎屋さんが復興への思いを強くしたのは、震災3日後に再開した地元スーパーの専務の言葉だ。

「じっとしていても仕方ない。動いていれば、何かが起こる」

自分に何ができるか。椎屋さんは当時所属していた観光協会のブログでの情報発信を思いつく。

椎屋さんは、支援者が提供した物資をブログにアップ。ギターなどは生活必需品ではないが「ギターが流されて困っていた」と受け取る被災者の笑顔が嬉しかった。

夢プロジェクトの面々は、地元で商売を営む若手が中心だ。彼らはまちの中心となる駅前商店街の復興を願うとともに、まち全体の更なる復興と発展を目指す。そのひとつが、中心部とは別の場所に新たな商店街を建設することだという。椎屋さんはこう語る。

「商店街は買い物するだけの場所ではなく、地域住民の憩いの場でもあると思うんです。まちの人々が全員で協力し合うことで、もう一度山田に人が戻ってくることを願っています」

震災前に1万9千人だった町の人口は、現在1万7千人を割っている。安心して住める場所が1日も早く完成し、まちに憩いの場となる商店街が復活すれば、かつてのような賑わいも戻ってくるのではないだろうか。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社